

古事記から学ぶ その3
伊邪那岐命の旅とその終わり

<1> 伊邪那岐命の黄泉国訪問

伊邪那美命に先立たれた伊邪那岐命は悲しみのどん底にあった。

意を決して、伊邪那美命との再会を願って黄泉国（よもつくに）へ足を踏み入れることにした。

黄泉国は別名を夜見之國または根堅洲國（ねのかたすくに）・根國と言い死者の国で、生きている者の来訪を固く禁じている所である。御殿には冷たい石の扉があり、中に入ることはできない。

伊邪那岐命がはるばるここまで訪ねてきてくれたことを知った伊邪那美命は、迎えに出たものの石の扉に阻まれて対面することはできない。

「一緒に手掛けた国造りはまだ完成はしていない。また戻ってきて一緒に続きをしたい」と伊邪那岐命が嘆願したが、

「来てくれるのが遅かった。私はもう黄泉国の不浄な水と食物とで穢れてしまった。それでも構わず迎えに来て下さった気持ちに応じられるように、この国の神々に相談してみます」と言う返答で、

「私が神々に相談してくる間、私の姿を見てはなりません」と付け加えた。

伊邪那岐命は石の扉の前でひたすら待ち続けたが、何の応答もない。遂に耐え切れず、禁を破って扉をこじ開けて中に入ることにした。

闇の世界の中で、櫛の歯を折って火をつけた灯りを頼りに進むと、伊邪那美命の姿が現れたのだが。

<2> 伊邪那美命との再会と別離

伊邪那美命の体には蛆（うじ）がたかってクネクネと動き、体のいたるところから膿が流れ出している。そして、その腐り果てた体のいたるところから生まれ出ていたのは…

伊邪那美命の遺体から

- =頭から →●大雷（おおいかづち）
- =胸から →●火雷（ほのいかづち）
- =腹から →●黒雷（くろいかづち）
- =陰処から→●拆雷（さくいかづち）
- =左手から→●若雷（わきいかづち）
- =右手から→●土雷（つちいかづち）
- =左足から→●鳴雷（なるいかづち）
- =右足から→●伏雷（ふしいかづち）

伊邪那岐命は、おどろおどろしい光景に仰天して、恐怖のあまり一目散に逃げ出した。

「あなたは、約束を違えて、私の醜い姿を見てしましましたね」と叫んで、伊邪那美命は黄泉国の醜い女神たちに命じて、あとを追いかけさせた。

追わされて逃げる伊邪那岐命は、髪を縛ってあった黒い蔓を外して後方に投げつけた。地に落ちた蔓は野葡萄の実となって生え、その実を女神たちが食べている間に遠くへ逃げた。

しかしあくまですぐに追いつかれてしまい、今度は角髪（みずら）に結ったところに刺した櫛を取って、その歯を欠いて後方に投げつけた。落ちた櫛の歯は竹の子になり、女神たちがそれを食べている間に、ま

た逃げた。

伊邪那美命の怒りはさらに燃え上がり、わが身から出たハ柱の雷神に命じて、1500人の兵をつけて追跡させた。

伊邪那岐命は腰の十拳剣(とつかつるぎ)を振って追っ手を振り切って逃げた。そして死者の国とこの世との境にある黄泉比良坂(よもつひらさか)までたどり着いた。坂の麓にあった桃の実を三つ取り、追っ手に投げつけ、危急を逃れることができた。

伊邪那岐命は、助けてくれた桃にこう言った。「蘆茂る豊かなこの葦原中国(あしはらなかつくに)住むありとあらゆる命健やかな人たちが、つらい目にあって苦しんでいるときには、私同様に助けてやっておくれ」。そして桃の実に、「大神の実」という意味の

●意富加牟豆美命(おおかむづみのみこと) という名を与えた。

反撃にあつた伊邪那美命は、次は自ら夫のあとを追いかけてきた。伊邪那岐命は、千人力でやっと動かせるほどの大岩を引きずってきて、黄泉比良坂の中央部に据えて通行を遮断して、これを限りに契りを解くことを宣言した。

伊邪那美命は、「ならば、あなたの国の人々を、一日千人ずつ絞め殺してやる」

伊邪那岐命は対抗して、「一日千五百人の産屋を建てて子供を産ませる」。この応酬から、

伊邪那美命を黄泉津大神(よもつおおかみ)と言い、夫のあとに追いついたので道敷大神(ちしきのおおかみ)とも言うと言い伝えられている。

また、坂の中央に置いて道をふさいだ岩を、女神を追い返したことから道反大神(ちがえしのおおかみ)、塞坐黄泉戸大神(さやりますよみどのおおかみ)とも言う

「黄泉比良坂」は島根県松江市にある伊賦夜坂であるという伝承があり、石碑も建っているらしい。

<3> そして始まる次の時代

辛うじて難を逃れて国に帰った伊邪那岐命は、「何といやな汚らしい国へ出かけたものだ。わが身は全く穢れてしまった」と嘆き、筑紫の国の海に近い河口の阿波岐原(あわぎはら)で、穢れた体を清める儀式を行った。この地は、現在の宮崎市の日向灘に面した阿波岐原町ではないかと言われている。

伊邪那岐命が身に着けていたものを捨てていくと、そこから順に神が生まれた。

伊邪那岐命が身に着けていたものから

=杖から→●衝立船戸神(つきたつふなどのかみ):災いがここに届くなどの意

=帯から→●道之長乳歯神(みちのながちはのかみ):道中の安全を守る

=腰の下に巻いた裳(も)から→●時置師神(ときおかしのかみ):解き置くの意

=上に着た衣から→●和豆良比能宇斯能神(わづらいのうしのかみ):煩いから免れたの意

=裳(も)の下に着ていた袴から→●道俣神(ちまたのかみ):衢(ちまた)を守るの意

=冠から→●飽呴之宇斯能神(あきぐいのうしのかみ):穢れが明けたことを示す

=左手の玉飾りから→ ●奥疎神(おきざかるのかみ):海神で沖と渚とその中間の海を示している
●奥津那芸佐毘古神(おきつなぎさびこのかみ):同上

●奥津甲斐弁羅神(おきつかいべらのかみ):同上

=右手の玉飾りから→ ●辺疎神(へざかるのかみ):同上

●辺津那芸佐毘古神(へつなぎさびこのかみ):同上

●辺津甲斐弁羅神(へつかいべらのかみ):同上

伊邪那岐命は身に着けていたものをすべて脱ぎ捨て、朝日に輝く川の流れに入つて、中瀬あたりまで進んで水にくぐり、水を注ぎ、洗い清めた。

伊邪那岐命が身を清める時に生まれた神は

=黄泉国で身に付いた穢れから → ●八十禍津日神(やそまがつひのかみ)

●大禍津日神(おおまがつひのかみ)

=この穢れを直そうとして生まれた → ●神直毘神(かむなおびのかみ)

●大直毘神(おおなおびのかみ)

=穢れをそいで清らかな体になったことを示す → ●伊豆能売神(いづのめのかみ)

=水の底深く沈んで清めた時に生まれた → ●底津綿津見神(そこつわたつみのかみ)

●底筒之男命(そこづつのをのみこと)

=水の中で体を注いだ時に出た → ●中津綿津見神(なかつわたつみのかみ)

●中筒之男命(なかづつのをのみこと)

=水の表に出て体を注いだ時に出た → ●上津綿津見神(うわつわたつみのかみ)

●上筒之男命(うわづつのをのみこと)

いずれも、星により航路を決めた当時の海路を守る神である。

→綿津見神の御子●宇都志日金折命(うつしひがなさくのみこと)の子孫は、
海人(あま:漁師)の部族を統べる阿曇の連(あづみのむらじ)で、
阿曇の連などが祖先の神として崇める神である。

→墨江(すみのえ)の三座の神となり、のちに住吉神社(大阪)の祭神になった

=左目を洗った時に生まれた → ●天照大御神(あまたらすおおみかみ)

=右目を洗った時に生まれた → ●月読命(つくよみのみこと)

=鼻を洗った時に生まれた → ●建速須佐之男命(たけはやすさのをのみこと)

伊邪那岐命は、首にかけていた玉飾りを外して天照大御神に渡し、「高天原を治めよ」と命じた。

受け渡された玉飾りは、御倉板拳之神(みくらたなのかみ)と言う。

次に月読命には、「夜之食國(よるのおおくに)を治めよ」と命じた。

建速須佐之男命には「海原を治めよ」と命じた。

かくして、「昼の國」と「夜の國」と「海原」とを治める役割が、三人の御子の手に委ねられて、次世代が動き始めたのだが、何と次なるトラブルが待ち構えていたとは…。

<4> 閑話休題(神と命)

古事記を読み始めて気が付いたことがある。

天神(あまつかみ)の出現から神代七世(かみよななよ)までは、イザナギ・イザナミの表記が、「伊邪那岐神・伊邪那美神」となっているが、次の章に入ると「伊邪那岐命・伊邪那美命」と変わっている。気になって調べてみたら、原文の上でもそうなっていることがわかった。

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神…

…次於母陀流神、次妹阿夜上訶志古泥神…次伊邪那岐神、次妹伊邪那美神。

・・・・・・・・・・・・・・

於是天神、諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神「修理固成是多陀用幣流之國

天地開闢を始まりとして、最初に意図することなく自然に発生したのが「神」で、天神（あまつかみ）の出現から神代七世（かみよななよ）の最後に誕生した神が伊邪那岐神・伊邪那美神。
伊邪那岐神・伊邪那美神が、天神（あまつかみ）から「国造り」の使命を与えられたところから、「公認の神」としてその存在と役割を認められたという意味で「命（みこと）」という呼称になったということのようだ。

以上

●参考した情報

古事記原文 https://www.seisaku.bz/kojiki_index.html